

## テモテ第一6章1-10節 「満ち足りた生活」

### 1A 尊敬を払う奴隷 1-2

### 2A 敬虔にかなう教え 3-10

#### 1B 言葉の争い 3-5

#### 2B 金銭への愛 6-10

## 本文

私たちの学びは、テモテへの手紙第一6章に入ります。今日は前半部分、1-10節までを読んでいきたいと思います。

### 1A 尊敬を払う奴隷 1-2

1 くびきの下にある奴隷は、自分の主人を十分に尊敬すべき人だと考えなさい。それは神の御名と教えとがそしられないためです。

パウロは、テモテに対して、私たちキリスト者の生きるべき指針、教えというのは、敬虔にかなうこと、つまり神のような、キリストに似た生き方を目標としているというものでした。「この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています。(1:5)」そこでパウロは、その敬虔にかなう生き方として、「尊敬する」という要素を多く語っています。2章において、全ての人のために祈り、特に王のため、高い地位にいる人のために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい、と言っています(1節)。そして5章から、教会にいる人々に対する尊敬を書いています。年老いた人に対して、また若者に対しても尊敬を払います。そして具体的に、寡についての扶養についてもパウロは議論しました。霊的に奉仕を優先させるという原則の中で、貧しい人に分け与えるという教えがそこにありました。そして5章後半に、長老たち、御言葉を教えている人々に対する尊敬について書いてあります。精神的、霊的な尊敬のみならず、物質的にも支える義務があることを教えました。

そして6章に入っています。ここでは主人と奴隷の関係において、奴隷が主人に尊敬を払いなさいと教えているところです。ローマ帝国においては、その半分が奴隷であったと言われています。その奴隷にもいろいろな階級があり、教育を受け、文化的な生活をしていた人たちもいますが、法的には人間とみなされず、所有物でありました。けれども、旧約聖書において、イスラエル人の救いは奴隷状態から解放されて、自由人になるというところに現われていました。そして、キリストの福音は、全ての人々が神の前で罪人であり、全ての人々が信仰によって、恵みによって、救われるのだというものであり、差別がありません。「ガラテヤ 3:28 ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。」

けれども、ローマ社会の中で現に奴隷状態の中にいる人々が大勢います。その中でイエス様を信じた人々もたくさん起こされています。そこで使徒たちは、数多く、奴隷である時にイエス様を信じた者として、どのように生きなければいけないかを教えています。ここでパウロは、「尊敬を払って主人に仕えなさい。」と教えています。

ここで、私たちの信仰というのは、イエスご自身に倣って生きているということに戻らないといけません。イエス様はどう地上を生きられたか、ということなのです。主は、ローマ社会にあるユダヤ人共同体の中で生まれ育ち、そこには様々な不条理がありました。その制度そのものを変えようとはされませんでした。政治的にも、社会的にも改革や革命を行おうとはしておられませんでした。それら全ての立てられた制度の中で、それを尊重して、人々に憐れみの行ないをされて、正義を行われました。ご自分が召されたのは、父なる神の御心を行なうことであり、御父がご自身を引き上げる時まで、その召されたところに留まり、僕の姿を取っておられました。

そこでパウロは、コリントにある教会に対して、第一の手紙ですが、奴隷状態の人が救いを得た時にどうすればよいかを教えています。「7:20-24 おのおの自分が召されたときの状態にとどまっていなさい。奴隷の状態で召されたのなら、それを気にしてはいけません。しかし、もし自由の身になれるなら、むしろ自由になりなさい。奴隷も、主にあつて召された者は、主に属する自由人であり、同じように、自由人も、召された者はキリストに属する奴隷だからです。あなたがたは、代価をもって買われたのです。人間の奴隷となつてはいけません。兄弟たち。おのおの召されたときのままの状態、神の御前にいなさい。」つまり、主ご自身と同じように、自分が召されたところにとどまります。そこで主に仕えます。けれども、霊的には、そこにおいて完全な自由人であり、人の所有物、奴隷ではないのだということです。ですから、同じことをしているのですが、その心のあり方は全く変わっています。そして、もし奴隷から解放される機会が与えられるなら自由人になればよいのですが、自分でその立場を変える必要はありません。

しかし教会に来れば、当時、奴隷の身分の人が集まっても、主人の身分の人が集まっても、同じ取り扱いですし、そうあるべきです。ヤコブの手紙 2 章で、そのようないろいろな身分にいる人々がいる中で、身分の高い人を席の前に案内して、貧しい人をそこで座っていなさいと言って、心で差別してはいけないと戒めています。キリスト者たちが集まれば、そこで一つにされているのだというところに、私たちが世から別たれた、聖なる国民であることを表しています。けれども社会に戻る時は、父の独り子であられる方が、僕の姿を取られたように、彼らもそれぞれ召されている所で主に仕えます。

それで、「自分の主人を十分に尊敬すべき人だと考えなさい。」とパウロは勧めているのです。奴隷であり、キリスト者である者が陥りがちな誘惑は、「自分は自由人なのだから、主人に従う必要はない。」というものでしょう。人間には、怠けるという性向がありますから、キリストによって味わった自由をもってそうした怠け心を働かせる機会としてしまいがちです。パウロは、「ただ、その自由

を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。(ガラテヤ 5:13)」

そしてパウロは、その目的を、「それは神の御名と教えとがそしられないためです。」と言っています。その主人や、共に働いている人にとって、神について、キリストの教えについて知るきっかけは、自分がその人を心から尊敬して働いているかどうか、ということでもあります。他に、知ることのできる機会はあるかもしれませんが、自分がそこに召されて、いわば生ける証人、あるいは宣教者となっているのです。ですから、神についてのイメージが試されます。またキリストについての教えが試されます。私はこのことが、自分のしっかりとした働きぶりだけではないような気がします。職場における現実をしばしば聞きます。上司がその場を立ち去る、あるいは仕事仲間がその場を立ち去ると、一斉にその人についてのうわさ話や悪口が始まると聞きました。その時に、そのような罪に加わらないということは、心からの尊敬を示すことができるでしょう。また、ただ業務だけをこなして、心が伴っていないということもあるかもしれません。それもいけませんね、「十分に尊敬すべき人だと考えなさい。」と教えています。

2 信者である主人を持つ人は、主人が兄弟だからといって軽く見ず、むしろ、ますますよく仕えなさい。なぜなら、その良い奉仕から益を受けるのは信者であり、愛されている人だからです。あなたは、これらのことを教え、また勧めなさい。

不信者である主人であれば、自分がその主人や職場において唯一の証し人かもしれないという動機が働きますが、信者であればどうでしょうか？キリスト者で奴隷を持つ主人ということは、数多くあったと思います。パウロが手紙の中で主人に対して、公平に奴隷を取り扱いなさい、虐げてはいけないことを教えていますし、ピレモンへの手紙はまさに、主人ピレモンに対してパウロが、奴隷であったオネシヤはり、新約聖書の教え、キリストにかなう教えは、もう主を既に知っているのだから、その必要はありません。すると、再び怠け心が起こります。「主人が兄弟だからといって軽く見」ということが起こります。教会においては兄弟です。だから、その同じ関係によって仕事においてしっかりと働かないという誘惑が起こるのです。

ここにおいて、線引きがあいまいになっている現実的な話はよく聞きます。アメリカでの話ですが、キリスト教のラジオ局において、不動産の宣伝がありました。もちろんクリスチャンだと名乗っている不動産です。それで信頼して、家の売却をお願いしたところ、とんでもない仕打ちを受けたとのこと。そして、「クリスチャンなのだから、許さないといけない。」というような空気ができあがります。いいえ、本来なら未信者の不動産の世界の中でも誠実であること、しっかりとした業務をしなければいけないのです。公平でなければいけません。けれども、信者であれば使ってくれるであろうという甘い考えの下で、そういったクリスチャンのラジオ局で自分たちを宣伝しているのです。

ですから不信者の主人とは異なる動機によって、信者である主人に仕えることを教えています。「その良い奉仕から益を受けるのは信者であり、愛されている人だから」ということです。そうです、

自分が一生懸命働けば、それだけ愛する兄弟の収益になります。その収益をもって、その主人は教会においても、もっと主に喜びの捧げ物をできるかもしれません。こうやって兄弟を愛するという動機によって、ますます熱心に仕事に専念しなさいというのが勧めであります。

## 2A 敬虔にかなう教え 3-10

こうやって、パウロは「敬虔にかなう教え」をテモテに教えていきなさいと命じています。けれども、そうではない者たちが教会の中に入り込んで来ています。このことについては、手紙の初めに話していたものです。「1:3b-4 あなたは、エペソにずっととどまっていて、ある人たちが違った教えを説いたり、果てしのない空想話と系図とに心を奪われたりしないように命じてください。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすものではありません。」このように議論を引き起こすだけの者たちに向けて、再びパウロは話していきます。

## 1B 言葉の争い 3-5

3 違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと敬虔にかなう教えとに同意しない人がいるなら、4 その人は高慢になっており、何一つ悟らず、疑いをかけたり、ことばの争いをしたりする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、そしり、悪意の疑りが生じ、5 また、知性が腐ってしまって真理を失った人々、すなわち敬虔を利得の手段と考えている人たちの間には、絶え間のない紛争が生じるのです。

「違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと敬虔にかなう教えとに同意しない人がいるなら」というのが、これまで説明してきました、イエス・キリストの福音によって、神の救いにあずかり、神に似た、キリストに形に変えられる者の教えであります。その目標を持っているものとは違う教え、ということでもあります。事実、これはキリスト教会の中に入ってきます。それで、数多くの人々が傷つき、教会そのものに対する信頼をなくしています。そして残念なことに、その傷ついた人たちが自らも神の建てた教会を傷つけていくという、被害者が加害者にもなっています。イエス様は偽預言者を見分ける方法として、「あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです。(マタイ 7:20)」と言われました。見た目は素晴らしいことを言っています。羊のなりをしている、とイエス様は言われましたが、むしろ尤もなことを言っていて、羊のような優しさをもってして、実は人々の霊性をことごとく壊していくようなことをしています。その人たちの教えからは、敬虔という実が結ばれていないのです。

その教師たちの態度が何かを初めに説明しています。「高慢になっており」とあります。高慢というのは、しばしば威張っているようなことを言っていると思われがちです。そうではなく、ちょうど悪魔が、自分のおるべき領域を守らなかったとあるように、今、自分の置かれているところに満足してない状態のことを指しています。ですから、高慢はちょっとした妬みから出ているかもしれません。他の人や他の人たちとの比較から出ています。そして、他の人のことに疑いをかけさせることによって行なうかもしれません。自分の気に入っている人を自分に引き寄せることによって行なうかも

しれません。ナルニア王国を書いたC.S.ルイスは、高慢についてこのように「キリスト教の精髓」において説明しました。「われわれのプライド(傲慢・自負心)はたえず他者のプライドと競り合っているのである。プライドは本質的に競争的である。プライドは何かを所有することに喜びを感じるのではなく、隣人よりもより多く所有することに喜びを感じるのである。」

しかし私たちは、キリストが来られたのは、心の打ち砕かれた者のためであり、心砕かれた者を直して下さるというイザヤ書 61 章の預言を読みました。主の前に、私たちは心砕かれて、そしてその癒しにある御霊の働きの麗しさに預かる、この道を歩むことであります。

そして、教師のしていることは何か、「何一つ悟らず、疑いをかけたり、ことばの争いをしたりする病にかかっているのです。」既に一章で、パウロが彼らは何も悟っていないことを話していました。「1:7 律法の教師でありたいと望みながら、自分の言っていることも、また強く主張していることについても理解していません。」神の救いのご計画が、偽りのない愛、信仰、正しい良心ということを目指しているのに、聖書にある文言を知っていくことに躍起になっている姿です。「この箇所は、実はこういう意味があって、この聖書学者の説明によると、こんな意味がある。今の教会は、何も分かっていない。」とか、知識偏重になっていることもあります。また、ここではなくコロサイ書にあります、天使に出会ったというような神秘的な体験、自分で見た幻であるとか、やはり自分たちは特別な啓示を受けたかのような高ぶりを持ちます。

これは実際に起こっていることです。ある教会で私が、説教の奉仕に行きました。その後で、ある人が私に、「すばらしいメッセージでした。うちの教会の牧師は、全然分かっていないんです。」となんと牧師の説教を批判します。それで、帰りの電車でもいっしょに来て、延々と聖書解釈の持論を展開します。それはすぐに、私が良く知っている聖書学者の解説の焼き直しなのです。けれども、その聖書学者でさえ、そんなことを意図していたことは、私はよく知っていました。その教会の牧師が教えていることと、ほとんど同じ聖書解釈で、ちょっと表現が異なるだけです。このような重箱の隅をつつくようなことをしていますが、その人は延々と批判をして、おそらくはその人の周りで人が救われているとか、そんなことはないでしょう。

ですから、そうした言葉による争いをしているので悪い実を結びます。「そこから、ねたみ、争い、そしり、悪意の疑りが生じ」とあります。誰かの言葉を聞いて、もしそれを聞き続けて希望や愛、信仰が建て上げられているのであれば、聞き続けてください。けれども、妬み、争い、悪意や疑いが出てきてしまうのであれば、その人の教えからすぐに離れてください！このような話もありました、「この先生は、いろいろな牧師や説教者は危険な教えであるとか殊更に言うので、どの説教も疑いが生じて、落ち着いて聞いていられなくなった。」というものです。ですから霊の健康状態に気をつけましょう。健全な教えが健康状態なのに対して、このような人たちの教えは病気になっているのです。

そして、自分は真理を発見したと思っているのですが、実は「真理を失った」人なのだということです。実に哀れです。なぜなら、「知性が腐ってしまって」とあります。素直に考えることができなくなっている、これおかしいでしょう？ということが、もう麻痺してしまって分からなくなってしまう。

## 2B 金銭への愛 6-10

そして、「すなわち敬虔を利得の手段と考えている人たちの間には、絶え間のない紛争が生じるのです。」とありますね。高慢になっているということに関連しているかもしれませんが、「敬虔を利得の手段」にしているという、金銭への貪欲に関わる問題もあります。

それが絡むと、やはり「絶え間のない紛争が生じる」ということです。これもとても、現実味のある話です。教会の中で、見ていられない争いが起こっている時に、その背後には利得が絡んでいる場合が多いです。教会が、何かビジネスのようになってしまっている。企業の競争原理のようなものが入って来ってしまう。ましてや、牧師がビジネスに手を出して、それを教会に持ち込んでいくと大変なことになります。金銭の原理が入って来ないように、パウロは最善の注意を払っていて、例えばコリントでは、そしりを免れるために天幕作りをしていたとかかかれています(1コリント 9:15-19)。利得というものが、この文脈では金銭に絡むことですが、自分の達成したい政治目標であるとか、神の救いのご計画から離れて敬虔を利得の手段と考えると絶え間ない争いが生じます。

6 しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です。

ここに、金銭への欲を免れる方法が書かれています。「満ち足りる心」ですね。満ち足りた心があるわけで、富が自分を満たすことはないということです。その最も大きな手本がパウロの次の言葉でした。「ピリピ 4:11-12 乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にも知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。」私ははっきり覚えています。妻が仕事を辞めて、収入が減った後には実家に戻る時に新幹線の利用から、高速バスへの利用に変えたのを覚えています。けれども、そのバスの中でゆっくりと東北の景色を楽しむことができ、物がなくても主のすばらしさを味わうことができるその満足を味わうことができました。これが大きな利益を受ける道ですね。

7 私たちは何一つこの世に持って来なかったし、また何一つ持って出ることもできません。

もう一つ、富についての教えは、「長く続かない」ということです。かつてヨブも、パウロと同じことを語りました。「1:21 私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」裸で生まれて、そして裸で帰ります。だから、永續するのは自分の持っている物にはないのですが、私たちはそれがずっと続くという考えをいつの間にか持ってしまいます。だから、いつもなくなるかもしれない、けれども、「イエス様にあって私は満足

しています。」という心を持っているかどうかであります。

## 8 衣食があれば、それで満足すべきです。

そして富については、「生活の必要」が満たされるということに注目します。神は必要を満たしてくださいますが、欲望は満たしてごさいません。これは本当に要るものなのか、要らないものなのかを見分ける必要があります。実は私たちの持っているもので要らないものは数多くありますね、これがなければいけないというものはないのです。そしてそのような思いを持っていると、先にあるように絶え間ない争いが起こります。夫婦の間でも争いがあると、家のことであるとか、財産のことがあります、本当に必要な物かを考える必要があります。

6:9 金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。10 金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました。

金持ち、また金銭そのものが悪ではありません。祝福されることは間違っていない。しかし、金銭はマモンという神に十分になりえる力を持っています。イエスさまは、「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。・・・神にも仕え、また富にも仕えるということとはできません。」(マタイ 6:24)と言われました。金銭への愛と神への信仰は相容れないのです。金銭への愛によって悪を行った者として、バラムがいますね。彼は、イスラエルを呪うことができず、神がそれを祝福に変えられましたが、後で彼はバラクに助言をして、宿営に娘たちを送り込み、それでイスラエル人たちが神からの罰を受けるように、つまずきの石を置きました。それで彼は金銭を得たのです。しかし彼は、イスラエル人によって殺されました。

したがって、金銭を愛することについて心を注意深くしていないといけません。このことがきっかけで、いろいろな他の悪が出てきます。争いが出てきます。情欲を燃やすこともあるでしょう。妬みが出てきます。怒りや憤り、陰口もあるでしょう。そして、非常な苦痛をもって自分を指しとおしたとありますが、後で肉体において、また生活においてものすごい痛みを伴うこともあります。これらのことを、敬虔という名のもとで、つまり教会という場で展開されていくという問題があります。敬虔を装いながら実を否定するというのが、終わりの日の特徴であることを、パウロは第二の手紙で教えました。